

臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成16年(2004)新春号



新潟県立村松高等学校東京同窓会

No. 36

明けましておめでとうございます

今年こそ良い年になりますようお祈り申し上げます

空理・空論を排す

平成と改元されてから、もう15年が経ち、新しい年を迎える。先ずもって 新年の賀詞を申し上げる。

所謂、申年である。子供の頃に教わった「三猿主義」なるものを思い出した。「見ざる・聞かざる・言わざる」の三つである。良い意味の教訓の一つであったが、現代では、もう通用しない言葉になったのではないか。これを逆にして、昨今では見聞を広めることにより思うことをはっきり言う時代となっている。

然し今や、国内、国外を問わず至る処に紛争が多く、威嚇高かに自己主張を繰り返しているのが現状である。世に「お互いに話し合えば分かる」と言う人も多いが、それは評論家、売文業者のタワ言。政治家にも多い。実現するのは困難で期待薄。今こそ真剣に対応を考えなければならぬ時ではないか？言行一致が大切である。

さて前置きが長くなった。
話を小さくすれば我々の近辺にもある。

私の言いたいことは表題に掲げた空理・空論を排すのただの一行に尽きる。即ち“抛り所のない理屈を言うな、実行の出来ない議論を吐くな”ということである。

ボランティアではあるが私は役目柄、色々な会議に出る。そしてウンザリする時が屡々ある。

東京同窓会長 佐伯 益一（旧中27回）

延々と意見を述べる人が居るが結論的には何だかさっぱり分からない。最後はみんなで考えると、云うような言い方になる。時間の空費である。

発言する前に、その要旨をあらかじめ頭の中で纏めてから発言するべきであり、思いつきの発言は却って混乱の元となる。そもそも会議とは結論を得るためのものではないのか！会議は手短く終わり、後は雑談をする時間を設けたほうが良い。雑談の中から物事を学び、また良いアイデアも知恵も浮かんでくる筈である。

私は一介の土木屋であり総て結果を大事にする。そのために理論を明確にすることを常としている。図面をひく時でも、工事現場でも同様に考えている。

今年も会運営や行事執行のための会議が数多く開かれると思う。特に役員は会員を引っ張ってゆく蒸気機関車でなければならぬ。

以上述べた事柄を充分脳裏に浮かべて対処されることを願っている。脱線は許されない。

最後となったが、今年も益々大変な年になると思う。同窓先輩・同輩・後輩各位が常に健康であり夫々の分野に於いて十二分に活躍されることを心から祈り、念じて新年のご挨拶に代える次第である

副会長 鈴木 多喜男（高4回）

長期化しているデフレスパイラルは、あらゆる面に於いて私達の生活環境を不安に駆り立てています。経済、治安、教育、少子化、年金制度、さらに近々アップされる消費税の問題等、将来に向けて明るい日差しが一向に見えません。一言で政治に対する不信任感、閉塞感が漂っています。私達はこの厳しい社会環境の中で少しでも暮らしに対する満足感と仕事や趣味を楽しむ生き甲斐を見出す「安居楽業」と殺伐とした人間関係を温和な性格で心の触れ合える誠実な人間でありたい「温厚篤実」な人生を送りたい。今年も良き年であると同時に皆様のご健康を祈り新年の挨拶といたします。

副会長 深見 洋子（高7回）

季節は巡り、また、巡り、季節ごとに多くの花々が、樹々が、生命輝かせ、終わりを迎える。人も、同じように、でも少しづつ色合いを変えて、年は巡る。そして、巡り来る同窓会、ひとときの安らぎの場であれば、と思っています。

財務委員長 塚田 勝（高8回）

平成15年もあつという間に通り過ぎ、昨年はイラク戦争と北朝鮮問題、第二次小泉改造内閣、衆議院解散選挙、18年ぶりの阪神リーグ優勝と種々ニュースがありました。

個人的にも1リーグ時代からのファンとしては、2リーグになってから昭和37年、39年、60年と昨年の優勝は大変うれしい出来事でした。

東京同窓会もこの10年、大きな変化も無かったのが会員320名、年会費納入者220名、大会参加者も旧制の先輩の皆様が年々減少して昨年は3名の出席で、大会出席人数も80名前後となり寂しさが増すばかりです。今すぐ若い人達への勧誘もままならぬ状態だと思いますので会員の皆様方のお力をお借りして、各同期生を15～20名程に増やし、同期会を開くつもりで大会全体を盛り上げようではありませんか。

松高の伝統を守り続けて行く為にも、会員同士の協力が必要不可欠ですので、各期生の幹事さん！振るって我等が同窓会の為にがんばりましょう。本年度も何卒よろしくお願い申し上げます。



松高の再生を目指して

村松高等学校長 水茎 芳英

明けましておめでとうございます。昨年の4月に赴任しました新米校長でございます。母校発展のために微力ながらがんばりたいと思っております。

赴任早々、伊藤同窓会長様から母校の窮状をお聞きし、小生の目標は一つ、「松高の再生」であると決意いたしました。敢えて妄評をお許しいただけるなら、これまでの松高は「殿様商売」であったようです。資本主義社会の鉄則である競争に負けたと言ってよいでしょう。

いや、まだ勝負はついておりません。逆転勝ちのチャンスは十分あるはず。ただ、野球と異なることは、決して終わりの無いゲームであるということです。勝った、終わったと思った瞬間には敗者への坂道を真っ逆さまに転げ落ち始めているのが学校運営です。したがって、逆転はあっても逆転満塁ホームランとか、さよならホームランはありません。学校運営はツーアウトランナーなしからでも一本一本ヒットを積み重ねていく地道な努力を必要とするものであり、得点も1点1点積み重ねて勝ち続ける必要があります。

企業経営も同じでありましょう。常に世の中の動きを見定め、消費者のニーズに敏感になり、経営努力を継続しない限り衰退の一途を辿るのが企業の運命であります。

松高はこれまで、殿様商売をやっているところそこ

お客様は集まってきました。付近にあまり競争相手がいなかったからです。少子高齢化社会は、地方の過疎化に拍車をかけ、県の高等学校再編計画に見られるように、定員割れを起こす学校は学級減を余儀なくされていっております。松高も例外ではありませんでした。

平成15年4月、1学年6学級から5学級に減となりました。しかも、町内の山王・愛宕両中学校から松高への入学率は30%台です。つまり、約7割の生徒が五泉・新津・新潟方面の公・私立高校に入学しているわけです。

この現象は、松高は地元町民から見放されていることを端的に物語っております。この現象は、絶対にくい止めなければなりません。4月以来、職員に学校改革の必要性を訴え続け、地域の要望をよく聞き、町民から愛される松高を目指して努力しております。今は、まだ得点には結びついていないかもしれませんが、ヒット(改革)を一本一本打っているところです。

この度、同窓会にお願いして、夏の補習用に3教室にクーラーを入れていただくことになりました。

これは、同窓諸氏の皆様方から貴重な浄財をお願いすることになるかと思いますが、松高再生に向けて同窓諸氏のご協力を切にお願い申し上げ、新年のご挨拶といたします。

新年雑感 副会長 沢出 赳允 (高6回)

新年おめでとうございます

昨年、私は体調を崩しまして東京同窓会活動が出来ず誠に申し訳ありません。

新しい年を迎え日本の社会情勢を省みますと、財政危機、不況、治安の悪化等々で世界でも有数な住みにくい国になりました。その上、次世代を担う子供よりも、土地や家屋に執着し、遊びにもブレーキがなく「人より物」「勤労より遊び」の思想が蔓延し、将来に大きな禍根を残す社会になりました。今年も家庭や学校での教育と個々の意識改革と共に国の政治力に期待いたします。

新年にあたり東京同窓会の更なる発展と、会員皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

総務委員長 金子 鶴男 (高5回)

新春のお慶びを申し上げます。そしてこの一年が皆様にとりまして、健康で幸せな年になりますようにご祈念申し上げます。

さて、今年はさる年、こころを閉ざす生き方の象徴である「見ざる聞かざる言わざる」の三猿はいま「よく見て、よく聞き、よく語る」の人にならなければいけない

ようです。「老いた猿は罠にはかからない」とは、ギリシャの言葉で、経験が価値を生むという处世訓です。

関東近郊の同窓生の皆さん、昨今の目まぐるしい世間から、ホーとしたひとときを東京同窓会に参加して、青春時代のなかまと旧交をあたため、楽しく語り会いをしませんか。

事務局 八木 又一郎 (高7回)

昨年は天災(台風10、15号、十勝沖地震等々)があり、被害を被り大変でした。しかし、スポーツの面では水泳の北島の金メダルを初め明るいニュースもあり、今年のアテネオリンピックが楽しみでもあります。

さて、私達にとっては、松高での学校生活は青春そのものでした。先生方の情熱ある指導、部活動、憧れの人もいたでしょう、それにも増して友達との厚い友情の絆がありました。今日ある自分をみると村松高校なしでは考えられません。同窓会はこの熱い友情の絆の確認する場でもあります。今年6月5日(土)の東京同窓会大会でまた確認しあいたいと思います。皆様のご出席をおまちしております。

今年も皆様にとって素晴らしい年でありますよう心からお祈り申し上げ新年の挨拶といたします。

松高東京同窓会・第46回大会報告

第46回東京同窓会は平成15年6月7日(土)好天に恵まれ正午から東天紅上野店にて開催された。

83名の出席者数は昨年同様であったが男子57名、女子23名、来賓3名の内訳を見ると、女子会員の出席がいかにも少ない感じがする。男子の半分以上ではちょっと寂しい思いをした人が多かったのではと心配したが、少人数でも華があり、あちこちで大もての様子であった。

しかし、これは次大会に向けての反省点であり、幹事の工夫と努力を要する問題であると思う。もっとも全体の出席者の増加を図れば自然に解決するのであろうが・・・このたび村松から藤田暉輔同窓会副会長・今年、着任早々の水荃芳英学校長・松高同窓会担当の伊藤ヒサ様お三方がご多忙の中ご出席下さり、会長以下役員一同心からお礼申し上げる次第である。

さて、第一部は伊藤実行委員長の開会宣言で幕が開き、佐伯会長の大会挨拶が始まった。

次いで、水荃校長が母校の改革に取り組む方針を熱意を込めて話され、一同、期待を抱きながら聞き入った。

東京同窓会会則第三条(目的)は「東京同窓会は同窓会本部及び母校と連絡・提携を密にし、会員相互の親睦を図り、母校の発展に寄与することをもって目的とする」とある。

会員諸氏が母校の発展に可能な限りご尽力下さることを切に願うところである。

藤田副会長は会費・寄付金の責任者とのことで百周年記念行事を成功させようと意欲を燃やしておられた。

金子総務委員長の事業報告、塚田財務委員長の決算報告、佐久間監査役の報告で第一部は無事終了した。

第二部は斉藤和男氏の乾杯で始まり、ゆったりと懇談しながらの飲食は久しぶりに再会した旧友との時間の隔たりを一挙に縮めてくれ、やがて熊倉富次、真水道子両氏による相川音頭・佐渡おけさが始まり、ほろ酔い気分で懐かしの郷土民謡と踊りに魅了される。

また、今回も大勢の方々に景品を多数ご寄付頂き恒例の大抽選会が催された。いつも感じる事ながら、当選しても名乗り出ない方が必ず数人おられるのは不思議なことである。総括して、懇親会はゆつくりと会話・飲食をすることが出来、本来の姿を取り戻したように思う。後半は校歌・応援歌・旧女校歌等で盛り上がり来年の再会を固く約し今大会はお開きとなる。

なお二次会は同フロアの別室に約40名が集まり、上下の関係なくさらに打ち解けて会話が弾んだ。名残り惜しくも時間が迫り5時近く解散となり帰途につく。

大会実行委員会

東京同窓会・第46回大会収支決算書

平成15年6月7日 於・「東天紅」上野店(不忍池畔)

新潟県立村松高等学校 東京同窓会

収入の部 (単位:円)	支出の部 (単位:円)
① 会員懇親会費 640,000 男子 57名 @8,000 = 456,000 女子 23名 @8,000 = 184,000 計 80名	① 準備費 発送 330名 62,727 会議費 4/20 5.25 17,040 通信費 (葉書、切手) 40,665
② 祝儀 30,000 同窓会本部 3名 = 30,000 (藤田副会長・水荃校長・伊藤事務局長)	② 印刷費 3,200 案内状、会費納入、 雲村氏著作紹介 900
③ 会員寄付金 4名 11,000 山崎輝雄 4,000 吉井 清 3,000 塚田 勝 2,000 梁取政道 2,000	③ 懇親会費 647,190 83名分 @7,000 = 581,000 持込酒代 = 66,190
◎ 当日の年会費納入者のご氏名は次の会報(第37号)に一括して掲載いたします。	④ 来賓対応費 15,230 土産代(4名) 13,230 雲村氏著書寄贈 4冊 2,000
	⑤ 送料 (大会用品宅配便) 2,860
	⑥ 写真撮影費 7,387 フィルム・DPE費 = 5,547 送料 = 1,840
	⑦ 諸経費 6,390 備品(名札ケース)・交通費
合 計 681,000	合 計 744,984
(一般会計より補填) 63,984	収支差引額 (一般会計より補填) △ 63,984
総 計 744,984	総 計 744,984

以上 報告いたします。(8月8日作成)

会 長 佐 伯 益 一
財務委員長 塚 田 勝

第46回・東京同窓会出席者名簿

平成15年6月7日(土)

於 東天紅上野店

新潟県立村松高等学校東京同窓会

来賓(3名)	旧中学校(3名)	高校男子(54名)	高校男子	高校女子(18名)
同窓会 副会長 藤田 暉輔 様 村松高等学校長 水茎 芳英 様 村松高校同窓会担当 伊藤 ヒサ 様	27 佐伯 益一 33 伊藤 勇五 33 斉藤 和男	02 青木 猛 02 杵淵 政海 02 築取 正道 02 篠川 恒夫 03 長谷川 五郎 03 亀山 智明 03 工 幸雄 03 渡辺 八郎 04 加藤 清治 04 坂上 卓夫 04 下野 文幹 04 鈴木 健司 04 大島 惣四郎 04 鈴木 多喜男 04 弦巻 等 04 湊 久直 05 金子 鶴男 05 山崎 豊吉 05 新井 康夫 05 小黒 利雄 05 雲村 俊徳 06 佐久間 英輔 07 八木 又一郎 07 遠藤 昭 07 加藤 喜七 07 築取 錦二 08 伊藤 馥 08 山崎 輝雄 08 松尾 正春	08 小出 博三 08 関塚 豪 08 塚田 勝 08 吉井 清彰 08 高地 彰 09 石黒 四郎 09 熊倉 富次 09 高地 勝一 09 間藤 謙一 10 高岡 雄三 10 鶴巻 浩 10 大橋 貞夫 12 安部 實 12 今井 英雄 12 岩野 忻史 12 笠原 久 12 近藤 洋輝 12 佐藤 栄治 14 木村 寿一 16 小笠原 一憲 18 青木 敏和 18 笠原 静夫 18 斉藤 正義 18 高岡 英治 20 宮崎 信次	03 大島 エミ 03 佐藤 八重 05 向山 律子 07 深見 洋子 08 岡部 ユキ 08 片柳 ムツ 08 木村 孝子 08 緒形 美恵子 08 山西 愈佐子 08 治田 レイ子 10 小島 典子 10 真水 道子 11 風岡 智鶴子 12 高岡 五百子 12 徳永 道子 14 斉藤 弘子 14 横溝 美枝子 20 安達 繁子
	旧女学校(5名)			
	25 小林 早月 25 一氏 愛子 25 佐藤 玲子 25 鈴木 節子 25 佐藤 治			

会場風景



大会第一部挨拶

あ～あ早く終わらないかしら……



受付風景



名司会者・石黒、山西のご兩人



ヨッコラショッと

抽選会に景品寄贈された方々（順不同・敬称略）

佐伯 益一（中27）	斉藤 和男（中33）	小林 早月（女25）	鈴木 節子（女25）
青木 猛（高02）	杵渕 政海（高02）	篠川 恒夫（高02）	鈴木 健司（高04）
伊藤 馥（高08）	山崎 輝雄（高08）	塚田 勝（高08）	大橋 貞夫（高10）
笠原 久（高12）	青木 敏和（高18）	斉藤 正義（高18）	片柳 ムツ（高08）
木村 孝子（高08）	山西愈佐子（高08）	小島 典子（高10）	高岡五百子（高12）
徳永 道子（高12）			

◎ご協力ありがとうございました。

◎尚、当日は受付混雑のため記載漏れがありましたら
お詫び申し上げます。悪しからずご了承ください。



熊倉・真水ご両人の佐渡民謡踊り



懇親会 ご機嫌よろしいようで……



校歌・応援歌の熱唱？



合わせて450才？ の美女軍団

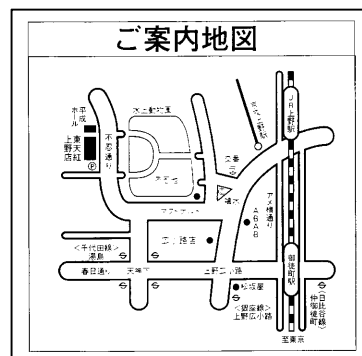
平成16年度 東京同窓会開催のお知らせ 村松高校東京同窓会第47回大会

◎日 時 16年6月19日（土）・正午開催

◎場 所 東天紅・上野店

◎住 所 台東区池の端1-4-33

TEL 03-3828-5111



交 通	J R・御徒町駅	徒歩10分
	京成線・京成上野駅	徒歩10分
	地下鉄千代田線・湯島駅	徒歩 3分
	地下鉄銀座線・上野広小路駅	徒歩10分



お便りの中から

順不同・敬称略

雲村 俊随 (高5回)

この度は、私の勝手な願いを快くお許しいただきまして本当にありがとうございました。金子鶴男さんから、幹事会の様子を聞きまして感動いたしました。

私は22歳でカッパブックスの光文社に入社し、女性自身、宝石、文芸図書、文庫などの編集部を歴任して定年を迎えました。そして初めて書いた小説『仙寿院裕子』が日本文芸家クラブ長編部門大賞を受賞したのです。

正直言ってビックリしました。優秀な編集者になろうと努力したことはありましたが、作家になろうという執念を燃やしたことは一度も無かったのですから。

ちょうど光文社から「編集顧問として残ってくれ」という誘いがあったので、物書きも兼ねてならという条件をつけてお受けすることに致しました。それで今年(H15)の4月まで足掛け9年間も勤めつづけました。

その間『堀部安兵衛』を書いたり『江戸の謎』を書いたり、澤村健の筆名で180冊余の文庫解説をこなしております。さて、今度の『大江戸怪盗伝』に何故、全力投球をしたのか、その理由は完全なフリーになっての第一作だからです。今までになく資料をあさり、構成を工夫し、書き直しも繰り返しました。

その結果、私はできるだけ多くの方々に読んでいただきたいと考えたのです。こんな思いを抱いたのは初めてのような気がします。本の形も廉価な文庫を自分から希望しました。すると折りよく、愛してやまない松高東京同窓会が開催されるというではありませんか。「そうだ、同窓生にこそ最初に捧げたい」と私は咄嗟にそう感じました。それで版元の祥伝社に相談を持ち掛けました。もともと、この本は6月10日に搬入、12日に全国の書店で発売と決まっていたのです。

すると版元は「いいでしょう、原則を破りましょう」といつてくれました。しかも50冊を特急で仕上げ、儲けなしの五百円で同窓会員にだけ売ってくれるというのです。ああ、よかった。万歳したい気持ちです。これも佐伯会長、幹事の皆様、そして出版界のよき仲間達のお陰です。

私はあと四冊を書こうとして、取材をし、想を練っています。だが、小説を仕上げる作業は格闘技をする様に似ています。歳をとり、力が尽きてしまったら、もうそれで終わりです。これからは、完成した作品は丁寧に人手に渡していくしかありません。その意味では『大江戸怪盗伝』は、とてもラッキーなスタートを切ってくれそうなので苦労した甲斐がありました。

心から感謝しております。重ねてお礼申し上げます。

村松高等学校長 水茎 芳英

先日は松高東京同窓会にお招きいただきありがとうございました。早速お礼状をいただき、恐縮致しております。町民から愛される魅力ある松高づくりを目指しまして、鋭意努力して参りますので、今後ともご協力の程よろしくお願い致します。また帰りにはお土産まで頂戴し、誠にありがとうございました。心から御礼申し上げます。皆様によりしくお伝えください。

村松高校同窓会担当 伊藤 ヒサ

過日の松高東京同窓会では、お懐かしい皆様にも久しぶりにお逢いして楽しい一日でした。本当にありがとうございました。改めて厚く御礼申し上げます。東京同窓会の会長様はじめ役員の方々々が心を一つにしてよくあんな立派な総会をおやりになったと感心したり、また羨ましくもなりました。

東京新潟県人会広報委員 市川 昭二

★貴同窓会報35号をご恵送くださいまして誠に有難うございました。年2回発行して35号、佐伯会長を始め各位の結束力に、ただ敬服あるのみです。

★佐伯会長の色々なコラム、賛成しかねるものもありますが、とに角、面白く読ませるのはサスガですね。

★八木さんの「ちょっと気になるコトバ」日本語の曖昧さをついた立派な文章と思いました。敗戦を終戦に、環境汚染は公害と言いくるめ、あたかも天然現象が起こったように誰の責任でもない誠にアイマイの言語風土の上に根づいた言葉、「センセイ」「閉まります」「したいと思います」。国際化が叫ばれています、そろそろ「私は…」という主語を大切に日本語にしたいものですね。

東京新潟県人会々員 匿名希望

過日は松高同窓会報をご恵贈賜り恐縮に思いつつ有り難く頂戴いたしました。

佐伯様には、日頃、お話や活字を通すなど、折にふれユニークで少年の心を失わず、気骨があつて人情深い、溢れたヒューマニティを感じ、陰ながら拍手を贈っております。素敵魅力のある方には、さぞかしファンも多いことと存じます。ファンの中には不束な粗忽者の私もおります由、これからは変わらぬご指導、ご交流を、よろしくお願い申し上げます。

ちょっといい話 ふみ 文を交わすのは楽しいこと。最近はメールに圧されて手紙等が少なくなったが、どんなに些細なことでも、また短くても、便りの中には温かい心が込められているものである。(伯)



お便りの中から 順不同・敬称略

武藤 三郎 (旧中26回)

会報六部早速にご惠贈賜り本当に恐縮致しております。村松に三人、五泉に二人、新津に一人とそれぞれ今日送りました。東京同窓会や会報に寄せるひと言を一筆してくれるよう依頼状もつけて出しましたが、次号に掲載して頂けそうな便りがありましたらご報告したいと思っております。東京同窓会での我々の存在は既に遠く霞んだ感もありまして時の流れの無常を実感しています。くれぐれも無理のないようご活躍をお祈り申し上げます。取り急ぎ御礼まで

村松町在住 相田 豊 (高9回)

梅雨明けも近いかと思うのですが二、三日強い雨が降っております。お変わりございませんか・・・
先日は「臥竜が丘は緑なり」を送って頂きありがとうございました。六月の東京同窓会の名簿を拝見し何人かの方々の名前を懐かしく思い出しました。
こんど村松の同窓会支部長を引き受けることになりましたが戸惑っています。よろしくご指導下さい。

雲村 俊雄 (高5回)

写真、うれしく頂戴いたしました。お忙しいのに、わざわざお送りいただいて本当に恐縮いたしております。
私もよくカメラを持って出かけるのですが、いつも撮りっ放し。大いに反省しております。
それにしても、写真は正直ですね。ああ、我れ老いたり、と天を仰ぎました。
今度お会いできるのは来年の六月でしょうか。いついつまでもお元気で。ありがとうございました。

小林 早月 (旧女25回)

暑中お見舞い申し上げます。お変わりなくお過ごしのことと存じます。先日はオバサン連のスナップ、合わせて450才、それなりに撮って下さり又、お手数をかけ有難くいただきました。この先何年お世話になるか分かりませんが何卒よろしくお願い致します。

ちょっといい話

小泉自民党総裁が再選された。即・首相である。いつも思う事だが、あの髪は何かならぬものか。耳の大半は髪で隠れている。あれでは国民の声が耳に入らぬだろう。この際、思いきって髪をカットして国民の声が良く聞こえるようにしたらどうでしょうかと進言したい。
(伯)

詩人と科学者

写真と紹介：笠原 久 (高12回)

高12回の木村安雄君は、本業の写真家と云うよりは詩人である。平成13年の春、還暦記念に「花の妖精たち」を世に著した。50種に近い草花を撮し、その一つ一つに詩が添えてある。詩に写真が添えてあると言っても良いかもしれない。彼の目を通すと一つ一つの花たちを妖精に早変わりさせてしまうのである。その一つ

かたくり

ひっそり

かたくりの花

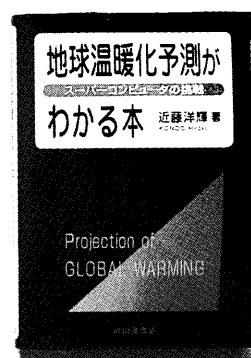
うつくしくも

いじらしく

どこかしら初恋の

人に見えてゆかし

[光村印刷(株) 発行]



もう一人の近藤洋輝君 (高12回) は気象庁に在庁のある時「6,000mの上空で雷さまと遊んでいるよ」と言っていた。その彼が平成14年の夏「地球温暖化予測がわかる本」——スーパーコンピューターの挑戦——を著した。迫り来る異常気象については、今日明日の問題ではないと思いつつも正に危機迫る警告の著書である。

[(株)成山堂書店 発行]

ちょっといい話

平成16年の干支は申(さる)。

そこで思い出した。若い時に聞いた話である。

むかし、田舎の大きな商家で嫁取り祝言の披露宴が開かれていた。そこへ余興として着飾った猿を連れた猿回しがやってきた。これを見て客のひとりが「目出度い席に猿(去る)とはなんだ、縁起でもない、即刻・立ち帰れ」と怒って一瞬、座は白けてしまった。
すると他の客人が「いや、猿が舞を舞っている、これは猿舞である。“去るまい”であるから目出度いのではないか」と言った。これを聞いた一同は大いに納得、去るまいぞ! 去るまいぞ! と囃し立て座は更に盛り上がっていたという。
(伯)

往時茫々愛恋の記

旧中二十七回・同級会

甘露の候10月6日午後、新津駅で4人を乗せ五泉駅で3人を拾い、宿出迎えのバスは一路、咲花温泉へと、ひた走る。誰かが「信号が多いな」と呟く。

今宵の宿は「いろいろの宿・ホテル平左エ門」である。先着の者5人を加え、今回は参加者12人で昨年よりも1人多い。本年度の旧中27回卒（昭和17年）の同級会の始まりである。

幹事が平成元年以来今日までの同級会開催の一覧表を作ってきた。それに依ると今年で15回目、最高は25人最低は9人であった。東京を始め蓬原、湯沢、厚木、上毛高原等と足を延ばしている。新潟近郊については言うまでもない。昭和年代の事については記録が無いので詳しくは分かれぬが調べれば分かる筈。よく続いたものと感心する。それにしても我々の学年は在学時代から他に例を見ない異色の存在で人材も多く、友情交流絶ゆることなきを誇りとしているが、然しこの間、多くの心友を戦陣や病で失っているのを残念に思う。

宿に着くと早速基盤を持ち出し烏鷲の戦いが始まる。余も久しぶりに黒石を握る。勝った。「凄いな」と誰かが言った。「な〜に、三目置かせてもらったからよ」と応ずる。宴会に入る。宿の仲居さんのサービスも満点。例によって話題は先ず持病の宣伝から始まり医博先生の講釈と続き、やがて話題は酒となる。

「酒のランクに月とか花、雪、千寿、万寿とかがあるのは人に贈る時、ちょっと具合が悪いな」と意見が出る。

「万寿の上にもう一つ名前があるのを知っているか？」と問うたら誰も知らぬと言う「オマンチョだ」と言ったとたんに目の前でお酌をしていた姐さんがひっくり返った。「万をこすから“万超”だよ」と苦しい弁明。

そこで座の空気は一変する。

「オレは毎朝一合半の飯を炊く、数えてみたら三千三百六十粒あった。一合なら二千二百四十粒になる」と元校長が言う「オマエよっぽどひまなんだな」と野次が飛び、元農林官僚は「大体そんなもんだナ」と答える。

我々の齢になると伴侶を亡くし、または入院中で不自由な日常を過ごしている者も多いと思うが誰もそんなことは、おくびにも出さない。

かくて、歌い・踊り・飲み、咲花の夜は更けてゆく。

翌朝もまた飲む。幹事の便りによれば、この度腹中に納まった酒はべて銚子63本、ビール10本、他に幹事寄贈の酒2升がある。よくぞ、飲んだものだ。幹事ドノまた曰く「80才ともなれば少し量が落ちたかなという感じ、男だけの席だったので無理な飲み方をしない紳士が多かったのかも知れませんね」だって！ …驚いた…皆ケロリとしていた。年老いと酒が体に合うらしい。

10時解散。宿の車で出発地まで送ってもらう。同行と三人で五泉の安勝寺に寄り旧友の墓に詣でる。新潟駅前でもた飲んで別れる。来年の幹事は新潟が当番となる。

各位の健在を祈るや切。幹事諸兄ご苦労さんでした。尚、宿の名前の由来を尋ねたら創設者の先代か先々代の名前が平左エ門であったのでそう名付けられたと、女将の答。姓を聞いたら「五十嵐」と返事が返ってきた。



さき花や つわ者どもの 夢のまえ



モンペ姿に 色気あり



選挙演説か？ 歌っているのか？

扱てここで咲花温泉について、ちょっと触れておく。

この地区は旧会津藩領の最西端にあつて明治19年、東蒲原郡が福島県から新潟県に編入されて以来、元東蒲原郡下条村佐取・咲花であつた。幕末の戊辰戦争の時、山縣有朋率いる政府軍と会津藩が激戦を交わした古戦場でもありJR咲花駅前には「佐取古戦場跡」の石碑がある。

また会津白虎隊の最前線地でもあつた。

昭和27年、温泉の堀削に成功し咲花温泉が生まれる。

この地の名称は当初、共同経営で始まった温泉旅館が、「先花」の小字名を「咲花」と変えて咲花館としたのが始まりと言われている。この佐取地区は昭和30年1月に下条村から分村して、五泉市に編入合併した。

この地区は今までに3回の水害に遭っている。1回目（昭和33年9月）と3回目（同53年6月）は阿賀野川の増水によるもので濁流に洗われたり流出する旅館が多かった。2回目（同42年8月）は川の増水ではなく裏手の山からの鉄砲水と崩壊土砂によるもので殆どの旅館や施設が壊滅し、死者も出る大災害となった。何れも台風と豪雨によるものであつた。その後、裏手の谷川に砂防ダムが建設され今ではその心配もなく旅館も10件を数え観光・保養の地として栄えている。

（咲花温泉については宿の女将から頂戴した資料を参考にした。多謝）
（佐伯・記）

旧中 26 回同級会 (昭和 16 年卒)

武藤 三郎 (旧中 26 回)

今年は村松在住者が幹事を担当し、湯田上温泉の「ホテル小柳」で 6 月 12 日に開催することにしたので万障繰り合わせて出席して貰いたいとの案内状が届いたのは 4 月中旬であった。

一昨年来、腰痛に悩まされている自分は、体質改善の為に針灸治療に通ったり温泉でマッサージを受けたり、市販の薬を飲み続けて少しでも回復するよう願ってきたが効果は期待したほどのものが得られず、申し込み期限の 5 月 20 日直前になって幹事に電話で事情を告白、欠席を了承して貰った。暫くして幹事から出席した 13 名の記念写真が送られてきたが、来年には元気な姿を見せてくれるようにと一筆添えてあって温かな友情が心に染み込む一時であった。今年 5 月現在の同級名簿も同封しており、卒業時 89 名の同期が既に 43 名が物故者となり、消息不明 2 名、現存者は 44 名とあった。自分のように体調を崩している者、或いはもっと不調で闘病生活を余儀なく過ごしている者もいるようだ。戦争犠牲者となって再会の叶わぬ人も少なくないが、人生 50 年と言われていたことを思うとよくぞこの年まで生かして貰ったものだ感慨は一入のものがある。

同級会は遠く過ぎ去った多感な頃の思い出話に若さを取り戻し、お互いの現在あることの喜びを分かち合いそして励まし合う何よりの場であろうと思っている。

記念写真は我々同期の占有物には違いないが、傘寿を迎えても尚集い合える姿をお目にかけたく敢えて投稿したものである。只自分の顔のないのは痛恨の極みであるが、次回こそ『浅酌低唱』の宴のなかに入りたい心境である。来年の幹事は新津、安田、新発田に在住してる人達と既に決まったようだ。会場が何処になるのか、これから苦労させることになると思うが今から楽しみである。



県立村松中学校第 26 回卒業生同級会
平成 15 年 6 月 12 日 於 ホテル小柳

高 4 回生・東京地区「お盆の懇親会」

鈴木 健司 (高 4 回)

まえがきとして高 4 回生 (昭和 27 年卒) の同期会・懇親会の現況についてまとめてみます。

統一の「同期会」は、地元の幹事役諸兄姉のご尽力で西暦の偶数年に隔年で開催しています。会場はほとんど新潟県内で、毎回 60 名～70 名参加しています。また、地元では毎年の春秋に「花見の会」「月見の会」と称し、主として村松地区・五泉地区の皆さんが懇親会を開催されています。概ね 30 名位の会合のようです。

東京地区では毎年、旧お盆前の 8 月上旬の懇親会と、12 月の忘年会が定着しています。今年の 8 月懇親会は、神楽坂の「日本出版クラブ会館・パピロスの間」に、8 月 9 日 (土) の夕方に集いました。当日は台風 14 号が通過する巡り合わせとなりました。関東地区直撃の可能性もあり、大いに心配されました。台風が日本海側を通過という風神の恩恵を受けた上に、諸兄姉が台風影響の中「雨ニモマケズ風ニモマケズ」の熱意で参集され、予定者全員 33 名の出席と偶然ですが今年の懇親会と同人数となりました。

今回は「立食パーティ」方式と新機軸を試みました。幸い好評で、全員で 1 時間の延長懇親会となりました。お盆前でもあり、故郷の話題・友人の消息・青春の回想お互いの健康 etc.、いつまでも語り合いが終わらず、解散後に、オール女性の 12 名が同じ会館内の喫茶室でお茶会となりました。男性は有志の方々と新宿ピラスクラブでの 2 次会となりました。

同期会・懇親会に参加出来るのも健康の賜物です。懇親会が盛り上がるのも、ベースに古希を超えたお互いの健康への祝福と感謝心があるからでしょう。健康の喜びと、敗戦による価値観・歴史観・社会構造激変体験の共有・青春の回顧と思い出を基にして残された人生の残照の中で肅々と「懇親会」を続けたいものです。



高 4 回生・東京お盆の懇親会

第14回 松五会

石川 滋 (高5回)

平成15年10月18日(土) 青山メトロ会館で松五会が開催された。新潟県立村松高等学校5回生は、現職で頑張っている人もあるが、既に年金生活に入っている人も居る。東京近郷に住む同級生は、幹事役の金子鶴男氏の呼びかけで、夕食会やゴルフの集まりを月一程度行ってきた。この会では、年に一度は5回生全員に呼びかけて、東京と新潟県下と交互に会を催してきた。今回は、雲村俊徳氏の紹介で東京で行われ、今年で14回目になった。

会の案内は、物故者と住所不明者を除いた5回生全員に往復葉書で発送された。返信には、各自の出欠の他に欠席の理由や近況が書かれていた。結局、出席者は女性6名と男性18名で合計24名の会となった。

受付では、卒業当時の写真入りの名簿が渡された。会の司会は鹿瀬町から通学していた向山律子氏(旧姓阿部)が行った。開会の挨拶・物故者への黙祷に続いて、乾杯の音頭は遙々津川町から来た五十嵐廣志氏が行った。続いて、出席者一人一人がスピーチを行った。自己紹介あり。近況報告あり。孫の話があり。一応に年輪を感じさせる風貌となっていたが、飲むほどに打ち解けて、昔の友達付き合いと化した。話しの弾むうちに思わぬ人脈が出来たりもしていた。

数人の有志のリードで校歌と応援歌の斉唱を行った。名簿にある歌詞を見ながら、よくもこんなに難しい言葉を口伝えて覚えたものと思った。笹川隆氏の一次会のべの言葉で二次会に入った。殆どの方が二次会に出席した。二次会終了後は帰宅する者、麻雀をする者、各部屋で三次会を行う者と色々であった。

現在ではそれぞれの異なった生活をしているであろうに、同じ高等学校を同じ時期に卒業したという只一点の交わりで近況を話し合い、旧交を温め合うことが出来たと云うことは素晴らしいことであつたと思う。



第14回 松五会 於青山メトロ会館 平成15年10月18日

3年3組同級会

深見 洋子 (高7回)

今回は、色々事情が重なる年令の所為か、参加者が13名と些か寂しい気がいたしました。

それでも会が始まると皆和気あいあい、楽しい一時を過ごして旧交を温めることが出来ました。次回は3年後、また逢える事を約束して散会となりました。

もっと多勢で参加できると、幹事さんへのねぎらいにもなりますよね。



松高第7回卒 3年3組同級会 於 咲花温泉 佐取館
平成15年10月19日開催

ちょっといい話

クラクションを鳴らしながら私の乗ったタクシーの横に並ぶと運転手が「停まれ・停まれ」と合図を送っている。怪訝に思いながら車を止めると、後ろのタクシーから恰幅の良い、かなり年配の男性が降りてきた「これ、貴方の財布でしょう。困ると思って追いかけて来ました」紛れもなく私の財布である。厚く謝意を述べて名刺を渡そうとすると「いや失礼ながら中の名刺を拝見しました。新潟県の人ですね、私も新潟です。お金には手を触れておりません」と言う。後続のタクシーを掴まえて後を追って来たらしい。名刺は貰えなかったが無理やり何がしかの礼金とタクシー代を受け取ってもらった。

どこの誰かかはついに分からずまい。その人は再び乗車すると会釈しながらすぐ立ち去ってしまった。店での支払いを済ませ歩道を歩きながらズボンの尻ポケットに入れる時に落としたのを見ていたらしい。それにしても世の中には素晴らしい人も居るものと思った。お陰でその日一日、いや翌日も清々しい気分で過ごすことができた。 もう一つある。 大分前の事だが、地下鉄の食堂街で食事を終わってから、さて支払いをとおもった時に財布を忘れて来たのに気が付いた。「この次でいいですよ」と店のママさんが言ってくれ、好意に甘えた。

以来、酒でも食事でもその店を最良にしている。主人夫婦も若いのが好人物、店員も愛想が良い。飲みながら新聞を読む癖を知っていて必ず持ってきてくれるし、客が店を出る時には全員で7~8回は「有難うございます」と礼を言っている。客を大事にする店である。ある時、その時の話をしたらママさんは「そうですよ、そういう人はきっとまた来てくれるものです、こういう商売をしていると人柄が分かります。質を預かっても何にもなりませんからね」と。

…… 嬉しくなった。…… (伯)

クラス会の佐渡旅行

新保 優 (高10回)

昭和33年度卒五組の1泊2日のクラス会に参加した。この会は20年以上続いており、幹事は地区ごとに持ちまわりされる。今回は新潟市在住の諸氏が幹事になり、佐渡旅行が企画された。権瓶先生を含め、男女合わせて16名が参加した。

在校当時の我々のクラスはまとまりが良いとは言えなくて、中でも男女間には普通の会話すらないシャイな集団であったが、不思議にクラス会への出席は良く、同級生35名の内、15名から20名を越える人数が常に集まっている。その昔の名残のためか少しよそよそしい集まりであり、羽目をはずす人も出ないので物足りないところもあるが、その分気楽に出席できるのがこの会の利点である。

両津港でフェリーを降りてホテルからの迎えのバスに乗り、新穂村のトキの里を見学した。立派な公園と観光施設が作られており、国を挙げてのトキ繁殖大プロジェクトが実感された。トキは観光コースから離れた場所で飼育されており、その姿を金網越しに、望遠鏡でのぞくようになっていた。立派な施設とは対照的にそこに至る道路は狭く、周辺の民家や神社には静かな田舎の風景がそのまま残っていた。



トキの里での一同

ホテル大佐渡温泉は相川の海岸に近いがけの上に建っていた。夕食の宴会では恒例のように、各人が近況を報告した。前回の集まりでは本人やその連れ合いが、会社の定年や体調変化などの激動期に当たっていたので、対処に懸命な姿が伺えたが、その後2年を経て皆それぞれに所を得、生活を楽しんでいる様子であった。

翌日は外海府と呼ばれる佐渡の北側の海岸沿いを地元出身の若いガイド嬢の案内で観光旅行した。海は穏やかで殆ど人影がなく、静かな岩場が続いていた。大きな岩や崖には岩百合の群落があり、その花が穏やかな朝の光の下で輝いていた。

海岸に近い夕鶴の里で民話を聞いた後で清水寺に詣で、万病に効く湧き水を頂いた。バスはそれから山道に入り

海府大橋に着いた。新しい立派な橋であるが、そこに至る道が未整備なため徒歩で渡るしかなく、絶好の展望台となっている。はるか下方には日本海に注ぐ川口が見え、反対側には山が迫るスケールの大きな景観であった。

賽の河原は海岸に沿った細道を500m以上も歩いた先にある。ここには大小さまざまな石地蔵が沢山の供物や飾りと共に、海岸の岩の上、海食洞窟の中などに無数に祭られていた。少し不気味ではあったがよく手入れされており、地元の人の心配りが感じられた。道の脇には野生の草花が手付かずに残っており、印象的であった。

今回の旅行の圧巻は大野亀のカンゾウの草原であった。崖に囲まれた亀の甲羅そっくりな、こんもりした岬が海に突き出ており、道路からそこまで尾根伝いに、広い草原がなだらかな起伏で続いている。その草原全体が無数のカンゾウの花でオレンジ色に染まり、岬の崖と、水平線まで見渡せる海と調和して、すばらしい眺めが広がっていた。

当日はちょうどカンゾウ祭りが開かれており、地元の人たちが大勢集まって酒盛りをしていた。また紅白の幕をめぐるせた舞台が作られて、それが風ではためく中でおけさ踊りなどが披露されていた。年に二日しかないお祭りに行き合わせた幸運を感じた。

カンゾウの原からあまり遠くない、二ツ亀の食堂で昼食を取った。地名は亀の甲が二つ連なったように見える島に由来する。祭りの影響で大変混雑しており、殺気立つ従業員をはらはらしながら見ていたが、あまり待たされずにサザエや新鮮な海藻類などからなる昼食にありつけた。ビールがおいしかった。

島の北から東への海岸線に沿った道は起伏やカーブが多く、西側の海岸で見られた岩ユリやカンゾウはまったくなくなっていた。午後の陽射しを浴びて進むバスの旅に少し疲れて、マタタビの白い花が混じる緑の林や、かい間見える海をぼんやりと眺めて時間を過ごした。

幾つもの集落を抜け、立派なトンネルを抜けると両津市の市街であった。旅の終わりに近づいて、ほっとしたような、また名残惜しいような感慨と共にバスを降り、最後の目的地である天領杯蔵元のお土産店に入った。



大野亀のカンゾウ原

50年ぶりの顔合わせ

夏の高校野球地方予選が始まると、母校の成績如何にと新聞を見ながら「アヘア 今年も……」を繰り返しているうちに50年の歳月が流れてしまった。

昨年の夏は異常気象で関東地方の梅雨明けは8月2日と遅かった。甲子園では例年通り8月7日から第85回全国高校野球選手権大会が行われ、茨城県代表の常総学院が夏の大会で初優勝を飾った。

昭和28年の第35回全国高校野球大会新潟県予選は、天候不順で日程が大幅に変更となった。県大会準決勝の前に甲子園出場を決める信越大会が行われ、新潟県から新潟南・新潟明訓・新発田高・村松高、長野県からは松商学園・松本市立高・小諸商・岡谷南と両県から四校ずつ出場した。村松高は松本市立高に2対3と惜敗した。信越代表として予想通り、松商学園が甲子園へ駒を進めた。この年の松商学園は強かった。後年、早稲田大学主将の木次一壘手、巨人で活躍した堀内投手、塩原二壘手など体格に恵まれ超高校級の技術を身につけた選手が多く、大会前から「信越代表は松商」と自他ともに確信していた。

信越大会も終わり、延期になっていた新潟県大会の準決勝・決勝が8月9日新潟市営白山球場で、日程の関係上ダブルヘッダーで行われた。若いとはいえ真夏の太陽照りつける猛暑の中、一日二試合は技術より体力との戦いとなって、村松高が初めて新潟県大会の優勝旗を母校に飾った。

8月12日から秋田県本庄市行われた東北各県と新潟県の優勝、準優勝校の記念大会で優勝し帰校。昭和28年夏の公式戦は7勝1敗の成績で三年生は対外試合に別れを告げた。(県大会、信越大会の結果は会報 第24号参照)



昭和28年 県大会優勝メダル

平成15年6月23日、新潟市において村松高校野球部昭和28年度在籍者で、50年前に約束した会合を開催した。当時の野球部長・安中 猛先生、主将の武藤 実、捕手の明間 洋、後藤国夫、一壘手・塩原清一の各氏は残念ながら他界されてしまった。

野球部OB 沢出 超允 (高6回)

当日は欠席者5名、出席者は三年生6名、二年生4名の合計10名、公式戦に監督をお願いした東間清吾氏(野球部OB、高3)も出席される予定で楽しみにしていたが、仕事の関係で欠席を余儀なくされホントに残念だった。

出席者の中には胃や腸を手術した者3名、足腰が痛く歩行不自由な者3名など体調が万全でない人達も、無理して集まってくれた。卒業以来、同級生はクラス会や同期会等で顔を合わせているが、学年が違う部活動のメンバーが一堂に会するのは50年ぶりであった。全員、昔とチットモ変わっていなかったことが何よりも嬉しかった。

集合場所は、庭球部で活躍した三浦節郎氏(高6)が経営する「万平」へ18時。監督や主将が不在の中、報告、黙祷、乾杯などを一通り済ませ会場へ。古町イタリア軒近くのスナックを一夜借り切って行われた。

店のママやホステスさんは「昔のこととは言え村松が新潟県で優勝したって？ウソでしょう！白山に野球場なんかないわヨ」と全く信用しなかった。

50年前の優勝メダルは、お粗末な材質であったが「優勝・1953」が証明してくれた。(左写真)

途中からハンドボール部主将・伊藤三男(高6)、三浦節郎の両氏も加わり、短い時間であったが懐かしい高校時代の部活動の想いに浸ることが出来た。ありがとー！

そして今は亡き主将の念願であった、50年前の約束を果たすことが出来て、ホッ！とした。

出席者の感想「また、来年やろってばあ」



昭和28年・野球部員 「万平」にて 2003.6.23
上段左から 斎藤(旧姓・佐藤)、捧、高橋(旧姓・白玉)
中列左から 渋谷、沢出、宮崎
前列左から 山崎、佐々木(旧姓・北沢)、川瀬、金子

★東間清吾氏は10月ご逝去されました
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



いざ八丈島へ

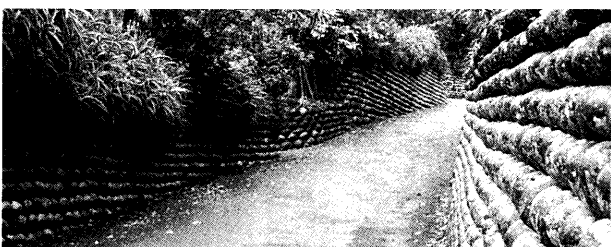
大橋 貞夫(高10回)

「切符が取れたよ～」と電話があったのが7月の終わり、8月13日～16日迄いよいよ八丈島へ行ける事になった。当日は日本全国前線に覆われ雨模様の中、二子玉川を出発した。6時半に羽田空港へ着くと既に同行する“ジュン”が待っており、直ちに搭乗手続きを済ませ天候の具合を案じながら一服する。長々とバスに揺られて飛行機に乗り込み7時45分、ジェットの轟音と共に羽田を飛び立った。途中、ガタンと降下したり揺れたりすると胃がキュウーとなるが、満席の乗客は平然としているので何食わぬ顔をして片道45分……八丈島の上空は雲が途切れ途切れにあるばかり。“俺は晴れ男”なんて自負しながら着陸すると、ジュンの兄貴(エッケ)が車で出迎えて居てくれた。いかにも亜熱帯らしいヤシの並木とよく舗装された道路を彼の住む檜立へ向かう。



空港通り

途中、「八丈島歴史民族資料館」に立ち寄り島の概要を勉強する。八丈島と三宅島の間に“黒瀬川”と呼ばれる黒潮が流れており時速7ノット以上にも達し、古来航海の難所とされ北部伊豆諸島と南部伊豆諸島との関連性を薄め八丈の文化は西南日本と結びつく事になる。島の南端に近い湯浜遺跡から発掘された土器・石器の特徴は、ほぼ同年代に比定される内地の縄文時代前期の様相とは著しく異なり、より南方諸島からの渡来と思われるが特定されていない。八丈島は北西から南東に伸びた瓢形をしており、北西部は西山(富士山854.3m)からなるコニーデ型の成層火山であるが、最後の火山活動は駿河の富士山と同時期である。この地域は「坂下」と呼ばれ透水性が強く溪流も温泉もない。南東部は東山(三原山700.9m)からなるカルデラでその後の侵食により複雑な山容を示している。なお八丈小島は東山の第一期火山活動時期に出来た小成層火山である。この三原山系は「坂上」と呼び保水性に富み、各地に小溪流や滝があり温泉も各地に点在し、水田があるのは伊豆諸島中ここだけである。



流人が積んだと云われる見事な玉石垣をしみじみ眺めてから大阪トンネルを抜け、漸くエッケご自慢のログハウスに到着すると“ワカちゃん”(彼の細君)がここやかに出迎えてくれ、久方ぶりの再会を喜び合う。檜立「ふれあいの湯」で一汗流し、その晩はワカちゃんのご両親と従兄のヒロちゃんも加わり大宴会となる。翌日は直ぐ近くの「服部屋敷」へ出向き、76歳を過ぎてなお元気なワカちゃんの父君等の民俗芸能を觀賞するが、早くも島の雰囲気になじんでしまい気分の良さも手伝って思わず黄八丈のコンパクトミラーを数個購入してしまった。



都指定無形民族文化財 檜立の場踊

エッケは「白いさんご礁」でヒットしたズーニーブーのリードギタリストで今も作曲等の活動をしている。その彼が立派なログハウスを友人の助けを借りながらも自力で作上げたのは感嘆に値する。ログハウスで大成功するかも?等と思いつつその日は眠りについた。

15日は久方ぶりに(約30年)海で泳ぐ事になり、水中眼鏡を購入して「乙千代ヶ浜」海水浴場へ向かう。外洋と岩で遮られているが、潜て見ると色とりどりの魚を見る事が出来、十分に堪能したので帰りの身支度をしていると雲行きが怪しくなり車に乗った途端スコールが襲ってきた。その夜、ジュンの鱈子スパゲティで宴会を盛り上げ気分が乗ったところで檜立の盆踊りに出かけた。ジュンと一緒に踊りの輪に入り、暫くすると酔いも手伝って「どうにも止まらない」状態になったので役員席で休んでいると、誰かが西瓜を持って来てくれたので有難く頂戴した。やがて八丈太鼓が始まり、老若男女が入れ替わり立ち代り叩いていたが、エッケの太鼓は皆が一目おいている様で“気分は最高”であった。

16日はいよいよ帰る日である。末吉温泉「みはらしの湯」で一時間近く過ごしたが、やや温めの露天風呂に入っていると風が頭を冷やし、高台からの見晴らしは最高である。帰路「黄八丈めゆ工房」を見学し財布など購入、土産物は専門店で宅急便に託す。昼食にラーメンを食べたが意外に美味しく、檜立のラーメンはお奨めである。四日間、天候に恵まれ真に楽しい日々を過ごせて、天と八丈島に心から感謝する。エッケ夫妻の見送りを受けて夕刻、悪天候の羽田に向かって飛び立つ。やはり羽田は雨だったがジュンに感謝して別れ、家路についた。自由が丘へ19,30に着いたので知り合いの演奏するピアノバーへタクシーを飛ばし旅の区切りをつけたのである。

伊藤馥氏個展にて

2003年9月1日(月)～7日(日)に伊藤氏(高8回)の個展が東京銀座の「ぎやらりいサムホール」にて催され、最終日の7日に拝観してきた。氏は日本美術家連盟会員で元国画会会友である。友人知人はもちろん通行人もぶらりと立ち寄り盛況であった。同窓の皆さんにも是非一度お立ち寄りされることをお奨めする。 広報委員会



写真右側 伊藤馥氏

ちよつとへんな話

近くにある行きつけの郵便局は、いつ行っても利用客で混雑している。時間帯もあるだろうが「人を増やしたら」と言ったことがある。「地区人口に合わせた定員が決まっているのです」との答えであった。

郵政公社になってから、また同じことを言った。売上げ(貯金を含めた取り扱い金高のことか?)が少なくなると減員される恐れがありますので何とぞご協力を!ときた。規則で決まっているものなら、何とも致し難いと思うが、貯金・振込・証券等を扱う窓口では優に40分ぐらいは待たされる。ならば、利用客のためにテレビぐらい備え付けてサービスするのが当然と考えるが如何なものか。待ち時間の長い病院では大概、備えてある。(伯)

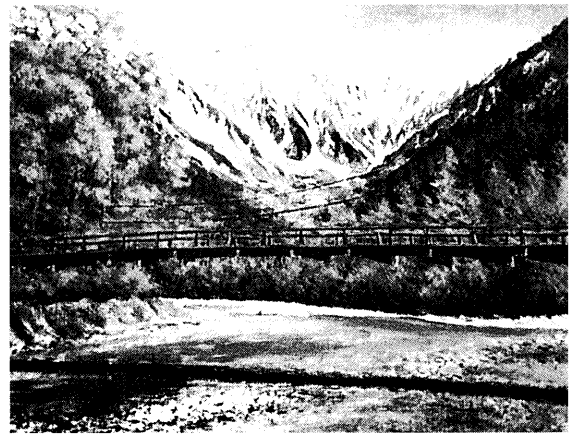
村松のお盆

久方ぶりのお盆の帰省である。8月13日盆の入り。暮れなずむ頃墓前に赴き水向け、献花、灯明、お香を焚き、祖先に日頃の無沙汰を詫び合掌。それぞれの墓前からも線香の煙とお明かりでお盆ならではの幻想的な光景が展開される。墓の灯明を家から持参した小ぶりの盆提灯に移し、寺を後にする。各家々の提灯が急ぐでもなく、ほんのりと家路につく。提灯の灯を仏壇のろうそくに灯す時、仏様が帰ってきたという。昔からの風習がなんともよい。盆踊りの行事も無くなって久しいという。車が増え道路を閉鎖できず、町の人達もテレビなど他の楽しみもあり消滅していったようだ。 蒔

——個展のお知らせ——



五色沼
F 12



上高地
F 15

第6回 小出博三氏(高8回)油絵展

- 会期 '04/2月29日(日)～3月6日(土)
AM11:00～PM7:00 最終日はPM5:00まで
- 会場 東京交通会館B1(シルバーサロンA)
千代田区有楽町2-10-1 Tel. 03-3215-3826
JR線 有楽町駅 京橋口 下車正面
地下鉄 有楽町線 有楽町駅 A8出口
丸ノ内線 銀座駅 下車

アトリエ●〒274-0812 船橋市三咲 7-22-20 Tel. 047-448-9632

先頃、医者に行き血圧を測ったところ、上が150mmHg下が90mmHgで加齢現象による『高血圧予備軍』と診断された。そして“高血圧”は「生活習慣病」なので『一に禁煙、二に減塩、三、四がなくて、五に節酒』と言われ、とりあえずタバコを辞めた。多少の抵抗感があったものの、少しでも長く生きていたいという欲望からか、思案するよりスナリと「禁煙」できた。外出時、タバコをポケットに入れる習慣が不要となったわけである。今(2003)年、巨人が早くから阪神の独走を許し、テレビ観戦でいつもワイフとチャンネル争いしていたのが嘘のようである。『タバコの持ち歩き』の不要、『巨人戦のテレビ観戦』の不要という両体験は何か物足りなさを感じるが、習慣という呪縛から解放された安堵感で満たされている。(蒔)



魚里

伊藤 勇五 (旧中33回)

時として、思わぬ人の口から故郷の話が出て驚くことがある。

昨秋、偶さか居合わせた人から“^{きとくせん}亀徳泉”と云う言葉を聞いたとき吃驚した。私の住まいから2分ばかりの処に、川の幅が10m、護岸の高さが3mほどの引地川と云う川があって、隣の藤沢市に続いている。

藤沢市との市境に近いところにある代辻橋の辺りには、下流から遡上して来る鯉が沢山群れをなしている。その中には郷里の三の宮で見たあの巨大な鯉にだって負けないほどの鯉も多い。代辻橋の直ぐ傍に車止めされている橋がある。ここには終日幾人も人が立ち寄って、見事な鯉の群れを見て驚嘆し合っていた。時々この人達が投げ与えるパンの耳はしなどを重なり合って争う態は、数が多いだけに壮絶でさえあった。或る日、床屋の帰りに橋で鯉を見ていると「あんな大きいのは然程美味しくないんです、その直ぐ後ろの2匹、あれ位なのが恰好です」と、

知らない隣の人が私に声をかけた。そして黙っている私に後の話を続けた。……今は定年で会社を退いているが、平成5年に新潟県の新潟市に単身で一年間出張していた。その時に村松町の“亀徳泉”と云う鉱泉で、初めて鯉料理を食べたが美味しかった。以来、幾度か行ったが鯉の味は私に合った。あれから10年、もう一度と思いながら実現出来ないでいる……と、懐かしそうに言った。

私も昭和の了わりから平成10年まで村松で過ごしたから、その話は鯉の味とともに懐かしかった。お陰でこの日は常になく村松で眠る亡妻のこと、母校や郷里のことなど胸の中で去来するものが多かった。

それにしても仕事の都合でここ2年、肝心のお盆に村松へ帰っていない。今年の8月には何としても思っている。尚、昨秋のあの人とは以来まだ会っていない。あの橋に立ち寄っていると思うのだが……。

◇ 募 集 ◇

会報「臥龍が丘は緑なり」を一緒に作りませんか！

興味のある方ご一報ください

◎ 年令無制限！ ◎ 性別問わず！ ◎ 無報酬！ ◎ 出来る事だけ！

◇ ちょっとしたお楽しみあります ◇

連絡先 〒158-0094 世田谷区玉川4-20-8 Tel&Fax 03-3709-1570

編集後記

去年の夏、八丈島へ三日ばかり旅行に行つて充分英気を養い、充電も出来たので、さて仕事をやろうとパソコンのSWを入れたら異常事態が発生していた。ウイルスにやられていたのである。旅行に出掛ける前、MSプラストが猛威を振るつていたので新聞で見えていたので、マイクロソフト社から送られてきた対策ソフトでアップデートしておいたのだが、素人の悲しさ、何か手違いがあったのか未だに納得していない。製造元に電話して症状の説明をしたら、完全な手遅れであった。全てのソフトを消去して完全に一日かかって復旧させたのだが、どうしても調子が今までと違つたので困っている。九月から36号新春号の編集を始めなければならぬので、何とかパソコンのご機嫌を損なわないように注意をしながら取り組んだ。従つて細かいところのミスが多少あつてもご勘弁を頂きたいのである。もつとも素人仕事であるから完全無欠の編集を要求されても出来ない相談ではあるのだが……。

いづれにしても会報作りとは大勢の方々に協力と援助を仰がなければなりません。今後とも皆様のお力を拝借してより良い会報を目指しますのでよろしくお願い申し上げます。

広報委員会

——表紙について——

写真は世田谷区鎌田地区の多摩川河川敷で例年、1月の第二日曜日に行われる「どんど焼き」である。暮れのうちに河川の葦を刈り取り、中心に太い青竹を据えて作る。炎は天を衝くばかりの眺めで、大勢の老若男女が見物に集まる。

(写真・文) 大橋 貞夫 (高10回)

平成16年1月 第36号

表紙の題名・題字は佐伯益一氏(旧中27)書

発行人 新潟県立村松高等学校東京同窓会
広報委員会

事務局 〒157-0061

世田谷区北烏山3-18-20 (八木 又一郎 方)

Tel&Fax 03-3307-1048